

世界遺産都市を歩く

第3回

幻惑を誘導する 都市

メキシコ・シティ

文・写真
西村幸夫
東大教授

1987年に「メキシコ・シティ歴史地区とソチミルコ」として世界遺産に登録された水郷地帯ソチミルコの運河。メキシコ・シティの南約28kmにある。古代ソチミルコ湖の生き残り。そして、現代のメキシコ・シティがかつて湖であった記憶をよみがえらせてくれる貴重な文化的景観である。



世界遺産都市を歩く

西半球最大のカテドラルであるメキシコ・シテイのメトロポリタン聖堂(左)はシテイのヘソであるソカロ(中心広場)に面して南向きに建っている。征服者コルテスの命により16世紀前半に建設が開始され、曲折を経て鐘楼とドームが最終的に完成したのは1813年だった。東に隣接して建っているのは Sagario Metropolitano



メキシコ・シテイの歴史地区を歩くとなぜかいつも軽い眩暈めまいにおそわれる。ひとつには、ここがかつての湖に立地しているため、多くの歴史的建造物が不動沈下を起こし(それはいまでも続いている。ここ百年間で10mほど沈下したといわれている)、まちを歩いても建物に入っても水平な床や垂直な柱が少ないからに違いない。街路は波打ち、古い建物は沈み傾いている。

そのうえ標高2200mを超える高地である。薄い空気に熱い街路の雑踏と渋滞する自動車の排ガスが加わるからなおさらだ。

この地にかつて存在したアステカ文明の巨大都市、ティノチティランがはかなくもスペイン人征服者の手によってすべて破壊された。こうした廃墟の瓦礫によって新しい都が建設され、殺戮の悲劇の土の上に現在のメキシコ・シテイがあるというおぞましい歴史を深層心理から消し去ることができないからかもしれない。

1521~22年の侵略で失われた人口50万人のアステカ文明の大都



H・コルテスの命により作成され、1524年に刊行された建設途上のメキシコ・シテイの図



テンプロ・マヨールはメトロポリタン聖堂の東に位置している。中心のピラミッドは地上60mに達していたと考えられる。数次にわたって拡張されている。寺院の大半はスペイン人によって1521年に破壊された。発掘が進み、1987年に博物館として公開されて現在に至っている

市ティノチティトランの廃墟の上にヌエバ・エスパーニャすなわちニュー・スペインの首都が建設された。現在のメキシコ・シテイである。

その後、島状だった土地の周辺も次第に埋め立てられ、巨大なテスココ湖はいまではまったく姿を消してしまっている。あとにはオフィス街のほか、延々と郊外に広がる低層の住宅地（その多くはファヴェーラスと呼ばれる不法占拠であるが）があるのみなのだ。

上図は、征服者ヘルナン・コルテスの命によって作成され、1524年に刊行された都市図である。ティノチティトランからニュー・スペインの首都への移行期の都市の姿が描かれている。都市が湖の中に浮かぶように佇んでいる様子がよくわかる。都市のモニュメントと集落群という人工物と自然の山や湖との間にふしぎな調和が存在しているのが感じられる。虐殺などにもないかのように！

私はメキシコ・シテイの波乱の歴史をよく知らない頃から、なぜかこの地図に不思議な磁力を感じてい

大勢の人でにぎわうメキシコ・シテイのソカロ（中心広場）。正式名称は憲法広場。元来、ソカロとは主としてメキシコ都市の都心の広場を指す普通名詞である。



ソカロ（中心広場）の北側の街路風景。道に勾配がついているのがわかる。



ソカロ（中心広場）の東側の街路風景



た。自著（『環境保全と景観創造』鹿島出版会、1997年）の表紙に使うくらいに気に入っており、また気になっていた。

中南米のスペイン植民都市に共通しているグリッド・パターン（網）によってメキシコ・シテイのまちも割り付けられている。中央に整形の広場を配し、その広場に面して教会と政庁とが立地するというルールも踏襲している。政府高官の住居もこの広場からほど近いところに計画された。現在は憲法広場、通称ソカロ（中心広場）と呼ばれる空間がこの都市のへそである。現在でも民族舞踊のパフォーマンスから古書フェア、政治集会まで、この広場は様々な使いこなされている。

ソカロに面して大陸最大のメトロポリタン聖堂そして国立宮殿が建っている。このほか旧市庁舎、旧商業センター、連邦地区政庁、最高裁判所、征服者ヘルナン・コルテスの住居などがソカロを取り囲むように立地し、植民地経営の首都の都心として文字通り荘厳化されていく過程が



ソカロの東側に建つ国立宮殿の中庭。1563年に最初の王宮が建設され、1692年の火災のあと、現在の形に再建された。メキシコがスペインから独立した1821年、国立宮殿と命名された。現在はメキシコ政府機関が入っている。部分的に一般公開されている。

世界遺産都市を歩く



国立宮殿内に描かれた画家ディエゴ・リベラによる一連の壁画、「メキシコの歴史」の一部

ソカロ(中心広場)の西側に東西に延びているタクシー通りの風景。左の建物は国立美術館



世界遺産都市を歩く

イタリアの建築家アダモ・ボアリがメキシコ人技師ゴンザロ・ガリタの助力を得て設計した中央郵便局。1907年にオープンした。中心部に配置されたモニュメンタルな鉄製の階段。外環はクリーム色の砂岩で作られている。ルネサンス・リバイバル様式の建築物の代表例として名高い



目に見える形で今に遺されている。

ソカロはメキシコ・シティという都市組織の芯なので、これまでに幾度もデザインが更新され、改変されてきた。にぎやかな市場の時代があり、並木が広場の四周を隈取りし、瀟洒な趣のある公園のようだった時代もあれば、中心にモニュメントが据えられ、求心性を高めた広場だった時代もある。下って20世紀の初めには幾何学的な庭園であったし、その後、交通広場だったこともある。

長い工夫の歴史の終結として、現在の広場がドライで無機質な空間となっていることが興味をそそる。ここはあくまでも建築が主役となる舞台であるというのが現代の都市デザインナーの解答なのだろう。あるいは、物理的な広場のデザインよりもそこでの多様なアクティビティ確保を重視しているのかもしれない。

現在、ビジネスの中心は西側に隣接した地区へ移っており、新旧二眼レフの都市となっている。開発と保全の両立が実現している奥行きのある都市といえは聞こえはいいが、新興の富裕層と少々くたびれた御本家



との対比を見ているようで考え込んでしまう。両地区を比べると、行き交う人の姿まで違うように見える。

ここが「メキシコ・シティの歴史的都心と郊外地ソチミルコ」の名称で世界遺産に登録されたのは1987年、メキシコで最初に登録された6物件のひとつである。

歴史的都心のコア・ゾーンにはティノチティトランの中心神殿であるテンプロ・マヨールの遺跡から1934年に完成したアールデコの華麗な国立芸術院宮殿までが含まれている。この地の14世紀から20世紀までの歴史がすべてカバーされている。

ソチミルコはメキシコ・シティの南約28kmに位置する水郷地帯で、「新世界のベニス」とも呼ばれたアステカ文明の首都の風情を彷彿とさせる名勝地である。かつてテスココ湖が水を満々とたたえていた時代のこのあたりの風景をとどめている唯一の地域として、メキシコ・シティとセットで世界文化遺産として登録されている。

1万人以上の死者が出た1985



世界遺産都市を歩く



ソカロ(中心広場)東側の街路の雑踏。上の写真のような花嫁姿の囃人形がまちのそこここに据えられている

年9月の大地震の爪痕はすでに見られないが、すべての都市問題が順調に解決に向かっているわけではない。現在のメキシコ・シテイは圏域人口2400万人をかぞえる超巨大都市であり、今もなお拡大を続けている。その歴史的都心ということは常に数々の変化の圧力を受けているということを意味している。

2006年、メキシコ・シテイはワールド・モニュメント・ファンドが1年おきに実施している「ワールド・モニュメント・ウォッチ・100の最も危機的な遺産」のひとつに挙げられた。この都市が現在、大気汚染、人口増、経済政策の失敗による建造物の維持管理の停滞、犯罪の増加、地下の帯水層の枯渇による地盤沈下などの多方面の困難に直面しているということがその理由である。そしてその解決策はなかなか見えてこない。

顕著な歴史都市であると同時に膨張と地盤沈下を続ける超巨大都市——メキシコ・シテイの核心部分が醸し出す幻惑の妖気も、しばらくは続きそうである。